
野良猫の言い分

crea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野良猫の言い分

【Nコード】

N4037D

【作者名】

crea

【あらすじ】

野良猫の品格、野良猫の落語、野良猫のインシュタインパラダイム、野良猫のパラダイムギャップ、野良猫の…

野良猫の品格

壊れかけた神社の狛犬の前でアムは毛繕いをしていた。
親友のラーとの待ち合わせの時間にはまだ5分あった。

「お待ちになった？ごめんなさい」

「別に：まだ12時5分前だし」

いつものラーなら平気で約束の時間に遅れて謝りもしないのに、何か変だ。取って付けたような丁寧な言葉遣いも、何か変だ。

「ワインの美味しい三ツ星の店で昼食ということでもよろしいかしら？」

「こんな下町のどこにそんな店があったっけ？あんた今日はおかしいよ」

「まあ、そんな硬いこと言わずにさ」

「どっちがじゃー！」

アムとラーは並んで石畳の上を歩き、色褪せた鳥居をくぐると、いつものコースを辿って行った。

二人はいつものように児童遊園をショートカットしようとしたが、今日は様子が違っていた。

滑り台の下に野良犬がうずくまっていたのだ。よく見るとそれはラーが住んでいる家の隣の家の飼い犬だった。

「隣の家の人、会社が倒産してあいつを残したまま夜逃げしたんだって。」

ラーは野良猫ではなかった。元々は捨て猫だったが、たまたま迷い込んだ今の家の奥さんに気に入られたので、そのまま住み着いているのだ。しかし飼い猫などという自覚は微塵も無く、未だにアムとは親友である。

「それにしてもあいつの情けない様子ったらないわね」

昨日までのその犬なら、アムと目が合うと勝ち誇ったように「ワ

オーン！」と吠えるのが常だった。

それが今日は、所在なさそうに目を伏せているではないか。

「アム言ってたわよね。犬の発するエネルギーはニュートン力学で、猫の発するエネルギーは相対性理論だって。飼い犬のときはまるで大砲のような勢いだったくせに、野良になった途端豆鉄砲以下に成り下がってるものねえ」

「あの落差は人間並みね」

アムは、わざと滑り台に近付いた。

「首輪失くしちゃったの？」

「……」

野良犬は無関心を装って口を閉ざしていた。

「元気だしなさいよ……って無理か、犬だもの」

「グフーツ……」

アムが目の前を横切ったとき、野良犬は半分威嚇するように、半分は悔しそうにうめき声を上げた。

ご主人様が迎えに来てくれるとか、新しいご主人様が現れるとか言って吠えないだけ潔いとアムは思った。

野良猫に避妊手術を施したりしている自治体もあるようだが、野良犬に関しては今のところ情報ははいっていない。飼い主にとって犬は忠実な家族のようなものかも知れないが、野に放たれた瞬間から、危険分子とみなされるのだ。

子供たちから「公園に首輪を着けてないワンちゃんがいたよ」と聞かされた保護者は、すぐさま役所か保健センターに通報することだろう。

捨てられた犬のATOMIC ENARGYは、限りなくゼロに近づく。

地位や財産を失った人間のそれと同じように。

「噛み付かれるかとひやひやしたわよ」

児童遊園の出口でラーがアムに話しかけた。

「あんた、未だに犬の習性が分かってないのね。時間なんていう人

間の都合で決めたルールがなくても、A T O M I C B O M Bでいられる猫や他の生命体と違って、犬だけは人間と同じなの。今のあいつには、そんな気力もないってこと」

「ラジャー！」

ラーは右手（右前足）を挙げて、敬礼のポーズをとった。

アムは猫年齢31歳の美しいシャム猫だった。

ラーは猫年齢20歳になったばかりの茶トラで、赤ちゃんのときこの児童遊園に捨てられていたのを、通りがかったアムが見つけた。それ以来姉妹のような親友のような関係を保っていた。

ラーが10歳になった頃、餌場の一つだった家の奥さんが二人を家の中に迎え入れようとしたが、アムは固辞したので、それ以来ラーだけがその家の住人となったのだ。

少し大きめの市道の信号を一つ渡ると、現在の建築基準法上では耐震強度60%程度の住宅が建ち並ぶ区域だった。

築30年以上経過しているであろう町並みは、ある種独特の雰囲気醸し出していた。

分譲当初は均一で見分けが付かなかったはずの住居は、時が流れるに従って、そこに住んでいる人々の状況を体現するかのように変化していた。

継ぎはぎの補修を施したものの、外壁や屋根瓦を派手な色にしているもの、庭が密林のようになって入り口さえ見えなくなっているものの、新しい所有者により新築されたもの。

稀に、何も手が加えられずに風化しかけた住居もあった。外から見た限りではその建築物は死んでいるに等しかった。

ラーはその死人のような佇まいをした家の鉄製の門扉の隙間をすり抜けて、アムにも中に入るよう促した。

「三ツ星のお店って、あんたの家じゃない」

「まあまあ、今日は玄関先じゃなく私の部屋で昼食よ」

ラーは嫌がるアムの尻尾を咥えて、玄関ドアの下にある猫用出入

り口の前まで引き摺って行くと、頭でアムのお尻を思い切り押した。家の中にも生命反応らしき気配は希薄であったが、華美な装飾など一切ない手入れの行き届いた斎場のように清浄な雰囲気が増っていた。

2階にある、真つ白なカーペットで敷き詰められた広い部屋。

普通の子供部屋の倍以上はある部屋は、机や玩具、ベッドなどが置かれていないので、雪に覆われた運動場のようだった。

「私のお城へようこそ。今日はここが三ツ星レストランだと思ってね」

部屋の真ん中には緑色のテーブルクロスが、カーペットの上に直に敷かれてあり、陶器の皿やワイングラスが2組セットされていた。それらは普段から玄関先で利用している餌用の器ではなく、とてつもなくフォーマルなものだった。

「お食事始めません？」

ラーは食器の前にちょこんと座り込んで、相変わらず歯の浮くような話し方でアムを促した。

近付いて良く見ると、少し赤色の混じった飲み物で満たされたワイングラスは、猫用にオーダーしたかのように重心を低くしてあった。

「念入りの仕事をするものね。これって何なの？」

食器の前には銀製のナイフ、フォーク、スプーンが並べられていた。

「それが今日のサプライズってとこかな？じゃあ頂きまーす」

アムは暫くラーの動向を静観することにした。

ラーは、おもむろに両サイドのナイフとフォークに両手（両前足）を置くと、暫くは腕立て伏せのような姿勢を保持していた。

果たして肉球の手のひらでナイフとフォークが掴めるものなのだろうか？これから先、ラーはどのように食事をするつもりなのだろう。アムは奇術でも見せられているように、少しワクワクしていた。

すると、ラーは並べられている銀製品を踏みつけながら、陶器の皿に歩み寄り、いつもの姿勢で食事を始めた。

期待はしていなかったとはいえ、アムは少々裏切られたような気分で、自分の前に置かれた銀製品を両手で掻き分けた。

ワイングラスに注がれていたのは、ミネラルウォーターで希釈した赤ワインだった。

意味不明なまま、アムにとってはありがた迷惑な食事が終わった。
「これって何の意味があった訳？」

ラーは部屋の隅っこへ行くと、一冊の本を啜えて戻って来て、アムの前に置いた。

本のタイトルは「猫の品格」だった。

「実践するためには、まず形から入らなくちゃと思って……」

「だけど、今日のこれって礼儀作法の範疇じゃない。この本にはそんなことしか書かれてなかったの？」

「まだ読んでないけど……」

ラーは右手で頭を掻きながら答えた。

「ふーん。まあいいや。じゃあ、これから話すことを良く聞くのよ」「はい」

ラーは、悪戯をして叱られた猫のように、うなだれていた。

「この本の内容がマナーに関することなら、人間や犬には読む価値もあると言えるわ。郷に入らば郷に従えという諺は知ってるでしょ？」

「知らない」

「……例えばイギリスの犬、スイスの犬、人間なら社長、学校の先生、政治家、芸能人、それぞれ必要とされるマナーがあるじゃない。お隣の韓国へ旅行するにしても、最低のマナーくらいは勉強しておかなくちゃ、相手に対して失礼だということね。人間や犬が生きている場所にはマナーというルールが存在するものなのよ。逆に言えば、人間や犬はマナーのない場所では生きて行けないの。だけどあ

んた猫でしょ。だったらマナーなんて必要ないじゃん」

「マナー以外のことが書かれていたら？」

ラーが上目遣いにアムの様子を窺いながら言った。

「品格って単語の意味が重要だけど……。私は品格って社会的な肩書きや、国境さえも越えたところにあるキャラクター……尊厳のようなものだと解釈しているけど。それって今流行のHOW TO本でしょ？ だったら読んでも無駄ね。尊敬される政治家とはこうあるべきだなんて書かれていたところで、そこだけを真似たってメッキはすぐ剥げちゃうわよ。男にもてる女の品格はこうだなんて書かれているのなら、そんなものを一所懸命読んでいることからして、品格の欠片も持ち合わせてないと思われて当然よ」

「猫の品格」はラーに啜えられると、そのままゴミ箱へ直行するようになった。

「少し酔っちゃったなあ……」

帰り道、アムは児童遊園に野良犬の姿を探してみたが、何処にも見当たらなかった。

夕方の児童遊園、誰もいないブランコを揺らす風は、少しだけ寂しい匂いがした。

野良猫の落語

正午前、シャム猫アムはいつものように神社の軒下で惰眠を貪っていた。

「アムちゃん、アムちゃん」

聞き慣れた声が聞こえた気がして目を開けると、茶トラのラーが鳥居を抜けて走り寄って来た。

「今日の餌場は、あんたとこじゃないよ」

「アムったら、いつでも食べることはっかりなんだから。寝て食べて、寝て食べて、31歳にもなって、そんなグータラしてたら駄目じゃない」

一昨日の昼食後「猫の品格」をゴミ箱にポイしたと思ったら、今日はもうタメ口に戻っている。

「そんなに慌てて何の用？」

アムはまだ眠り足りないように、寝起きの眼をこすった。

「隣の家に飼われていた犬だけどき、今何処にいると思う？」

「知らないよ、そんなこと」

アムは児童遊園の滑り台の下でうずくまっていた、寂しげな犬の姿を思い出した。

誰かの通報により保険所に連れて行かれるには、充分な時間が経過していた。

「今日から、近所の家で飼われることになったの」

「ふーん、良かったじゃない。うるさく吠えられるのは鬱陶しいけど」

「どうしてそんなことになったか、聞きたいでしょ？」

返事を待つまでもなく、ラーは既に高座に上がった積もりになっていた。

「ええ、まー」

「プキヤツ」と咳払いをしたのを合図に、ラーの落語が始まった。

えーっ、ある家に犬年齢で24歳になったばかりの白い雑種が飼われていたんですな。だから名前は「シロ」大きさはまあ、秋田犬の三分の二くらいでしょうか。三河犬のようでもあるんですが、血統書なんて肩書きがないもので、血統書がないことがまあ言えば、雑種の証明ってことでしょうか。

それが、ある草木も眠る夜のこと、ってんですから午前二時頃ですかねえ、家の前に4トントラックが止まったかと思うと、ご主人様たちがせつせと家財道具を運び出して、最後にシロの首輪を外すと、門を開けっ放しにしたまま、自家用車に乗ってトラックを先導するように、走り去ってしまったんですな。まあ、よくある夜逃げってやつですか。

その後シロはどうしたかって？

そりやもう、長い間飼い犬生活に馴らされていた犬ですから、ただならぬ出来事に心中穏やかでいれる訳もございません。夜が明けるまで飼い主の帰りを待つて、庭をうろろろしていたんです。

朝の散歩が午前7時なので、その時間には飼い主が戻って来て、餌も与えてくれるのではと、かすかな希望を抱いていたという訳です。

午前8時になり、表へ出て来た隣の家の奥さんが言うことには「あなた、保険所に連れて行かれるわよ」なんです。いきなりそんなことを言われちゃ、犬だって面食らっちゃいます。

おまけに「私は犬の飼い主には絶対なりません」と念を押されたものですから、シロとしてはその場を退散するしかなかったのです。

毎日散歩に来ていた児童遊園で空腹をこらえていると、野良猫にまで哀れみをかけられたりして落ち込んでいるところに、見覚えのある年老いた野良犬が通りがかったんですな

もう子供に危害を加える心配もない、社会が見て見ぬ振りをして

いるような、そんな犬です。何回か家の前をウロウロしていたことがあって、シロが「ワオーン！」と吠えると腰を抜かさんばかりに走って逃げる、それが面白くて驚かしていた。ただそれだけのことなんですけどね。

老犬を見たとき、シロにある考えが浮かんだんですな。

シロは老犬を驚かさないように近付き「いやー、この前はどうも失礼しました。なんせ飼い主が厳しくって、ご近所の方以外で家に近付くものがあれば、吠えないと散歩にも連れて行ってもらえないもので」と切り出しますと、最初は怯えていた老犬も、シロの飼い主から虐待を受けていたやら、引越しに紛れて命からがら逃げ出して来たやらの作り話に同情して、自分の集めて来た餌を全部あげたんですな。

その日老犬の隠れ家に泊めてもらったシロは、翌日も居座って、老犬の集めた餌を食べながら作戦を練っておりました。

さて、その日の夜のこと。

「おじいさんよー、あんたの餌を横取りするようなことをして悪かったなあ。実は俺にも当てがない訳じゃないんだ。昨日飼い主に虐待されていたという話はしたよな。餌を貰えない日なんてしょっちゅうでさあ、だけどここんところひもじい思いをしたことはなかったんだ」

「へえ、そうかい」

「なにね、ご近所に幼稚園に通ってる男の子がいてさ、お祖母さんと一緒に午前8時30分に俺ん家の前を通りがるんだけどさ、どちらも大の犬好きでさ、餌を抜かれた俺が男の子に向かってワンワンと元気良く吠えるのが合図になって、お祖母さんが用意していた餌をくれるんだ」

「へえ、そうかい」

「そのお祖母さんは、近所の野良犬にも餌をやっていたはずなんだが、おじいさんも知ってるんじゃないかい？」

「まあ、そんな人間も何人かいるさ」

「俺は、自由になれたこの機会にもっと広い世界を見て回ろうと思ってるんだ。だからおじいさんよー、あんたに権限委譲したいんだが、どうだろう？」

「へえ、そうかい」

「じゃあ、続きは明日ってことで、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

午前7時にはもう、シロと老犬は飼い主のいなくなった家へ到着してました。幼稚園への通園時間には早いですが、2匹の犬が連れ立って行動するには、タイムリミットと判断したんでしょうな。

「いいかいおじいさん。二人が通りかかったら側へ寄って行って、元気に吠えるんだ。俺はここから様子を見ているから安心すればいい。無理だと思ったらワンと一声合図するから、その時は逃げる。まあ、おじいさんのことだから、だいじょうぶだとは思っけだな」

「そうかい」

そうこうしているうちに午前8時30分となりまして、シロの言ったとおり御祖母さんと男の子が手を繋いでやって来ました。

老犬が外へ出て、二人が目の前を通り過ぎようとしたとき

「ワンワン、ワンワン」

老犬が尻尾を振って近付くと、代の犬好きの男の子は、お祖母さんの陰に隠れてしまいました。

ですが、シロからの合図はまだありません。

「ワンワン」

老犬が力を振り絞って、もう一度元気良く吠えた瞬間

「ガブッ」

シロの牙が老犬の首筋に突き刺さっていたんですな。

その後暫くして、お祖母さんの連絡で、虫の息の老犬は保険所へ連れて行かれました。

まあ、早い話が老犬はシロに利用されたってことですかねえ。

ですが、噛み付かれて息も絶え絶えなはずの老犬が、シロの方を見て満足そうに笑ったんです。

何故そんな些細なことまで分かるのかって？

そりゃ、あつしは隣の門柱の特等席で見物してましたから。

お後がよろしいようでチャンチャン。

「その老犬は、童話の泣いた赤鬼に登場する青鬼って訳ね。ハッピーエンドで良かったじゃない」

「どうしてそんなこと言うのよ。シロのやつときたら、老犬を見向きもせずに、尻尾を振りながら二人の後に付いて行ったのよ」

「別にいいじゃない」

「アムって時々凄く冷酷」

ラーは如何にも悔しそうに、アムの顔を睨んだ。

「犬と人間の話でしょ。猫の物差しで計るのは、それこそ杓子定規つてものよ」

「それもやっぱり、相対性理論とニュートン力学ってこと？」

「そう、彼等はニュートン・パラダイムのジレンマに生きる、進歩的でありながら時代遅れという存在なの」

「……ラジャ。お昼食べに来る？」

「いいわよ」

二人は石畳の上を並んで歩き出した。

野良猫のアインシュタイン・パラダイム

境内に植えられた桜の中の本が、季節外れの花を咲かそうとしていた。

それは地球にとっては些細な現象であり、猫には何の影響もなかった。

もちろん、桜の樹自身にとっても、どうでもいいことだった。

「他の桜も咲かないかなー。したらまた、お花見しようよ」

先に鳥居の下まで行っていたラーは、柱で爪を研ぎながら、いたって無邪気なものである。

「そうね」

「あのさーアム」

「なによ」

「ニートン・パラダイムのこと、もう少し聞きたいんだけど」

「いいわよ。じゃあ教室で」

「えっ、何処の？何処の？」

「あんたの部屋よ」

「えっ？家上がるのあんなに嫌がってたのに、気に入ったの？」

「まあね。奥さんも顔を出さないし」

「そうでしょ、アムが来たときには遠慮するように言ってるもの」
ラーは得意そうにスキップした。

家の近くまで来たところでラーが「シロが飼われてるのは、私の家よりちよつと先だけど、見に行く？」と言った。
「行かない」

アムは、ラーの家までの道筋にシロがいなくなったのなら、ラーとの昼食の回数を増やしてもいいなと考えていた。

家に着くとラーは「ちよつと待っててね」と言って、玄関ドアの

猫用入り口の中へ消えた。

しばらくすると中から「ニャー」と呼ぶ声がした。

真っ白なカーペットが敷かれたラーの部屋の真ん中には、一昨日と同じ綺麗に洗濯された緑色のテーブルクロスが広げられていたが、レストランのような食器類ではなく、普通の猫用の餌入れが置かれていた。

猫用ペットフードを何種類かブレンドした餌は、ラーのものとアムのもので随分違っていた。

アムの餌は何種類かが均等にブレンドされていたが、ラーの餌はすごくバランスが悪い。

「いくら鰹味が好きだからって、偏食ばかりしてたら痛風になっちゃうわよ」

「私は20歳でしょ、50歳で痛風になるとして30年先か、その頃には地球…は関係ないか、じゃなくって生態系の半分以上は淘汰されて、この辺りに住んでる猫も例外じゃないって言ってたじゃん。だったら別に気にしなくてもいいもんね」

「人間のルールを猫年齢に換算しないでよ。あんたが猫年齢110歳まで生きていれば淘汰される可能性大だけど。50歳から110歳まで、色んな成人病とお友達でいたい訳？」

「餌、交換してくれる？」

ラーは自分の餌入れに右手をかけて、ズリズリとアムの方へ押し出した。

「次からにすればいいでしょ」

「先延ばしは言い訳だって、アムがいつも言ってるじゃない」

「あんた、少し賢くなったんじゃない？でも交換してあげない。もう一つ選択肢があるでしょ」

「どんな？」

「食べないことよ」

結局ラーは、大好物の鰹味昼食を、半分以上食べ残した。

「意地っ張りなところは、相変わらずね」

昼食後、ラーはビデオを観ようと言い出した。

「電話してちょうだい……」「電話してちょうだい……」

ピアノのコマーシャルが何度も流れ、ラーは楽しそうに体を揺らしていた。

「猫だねえ……」

アムはニュートン・パラダイムの説明が、決して簡単ではないと覚悟せざるを得なかった。

「フーツ……」

仕事が終わって一息ついたというように、ラーはビデオを停止させた。

「じゃあ始めようか」

「何を？」

ラーは鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしてアムを見た。

「ニュートン・パラダイムよ」

「ラジャ！」

「出席を取ります。ラー」

「私一人ですけど、教授」

「余計なことは言わないの。それに私のことは先生と呼ぶように」

「でもー、講義を受けるなら教授でしょ、だった准教授？」

「猫には金に任せて行ける大学なんてないの。20歳でもあんたは中学生がいいとこ。だから先生と呼びなさい」

「はい」

「じゃあ始めます……コホン」

アムは丸めた右手を口許に当てて咳払いしたつもりだったが、実際は爪が少し動いただけだった。

未開発国家Ⅱ 本能的な欲望×（人力）

新興経済国家Ⅱ機能的な欲望×（石油）

Ⅱニュートン・パラダイム（資本主義の隆盛）

先進経済国家Ⅱスーパーフラットな欲望×（生体分子工学・量子論・相対性理論）

Ⅱアインシュタイン・パラダイム（資本主義の混迷・破綻）

先進経済国家の辿った、科学に基づく社会構造変遷の歴史は、現代の地球上に遍在している。

日本は、明治以降ニュートン・パラダイムによる幸福の実現、戦後以降幸福の意味の喪失という過程を経てきた。

そして現在、新興経済国家に対して、苦言を呈す立場に甘んじている。私たちの過ちを繰り返すことなかれと…。

確かに、二酸化炭素を撒き散らしての経済成長は、如何なものかと思われる。

しかし、ニュートン・パラダイムに基づく、科学技術の進歩、経済の発展は、ある意味では新興経済国家の国民に幸福をもたらしている。地球環境に悪影響があるとしても、親が子に、自分の若き日の過ちを繰り返すなど言いながら、自分の現在の行動においても相変わらず間違いを犯しているなら、説得力に欠ける反面教師ではない。そのような私たちには、機械文明の恩恵を享受したいという人間の欲望を否定する権利はない。ニュートン・パラダイムは本質的にイケイケなのだから。

すでに大量消費から無限浪費に変化したアインシュタイン・パラダイム国家の責務は、生体分子工学に倫理観を持ち込むのは当然のこととして、量子論の展開などにより無限の生産性を導き出す経済システムにも、倫理観を構築することだと言える。

量子論を駆使すれば、パソコンや携帯電話に次から次へと新機能を付加し、商品化することなど容易い。生活必需品とは思えないものを浪費させ続けるために、日本の経済システムが導入したのが、国民の生活自体をゲーム感覚に貶めることだ。

全ての欲望はスーパーフラットの地平で、決して満たされること

がない。

流行の先端を走り続けることは時代遅れであると認識すれば、アインシュタイン・パラダイムの混迷や破綻は解消できる。以上

「何か質問は？」

「はい先生。スーパーフラットな欲望って、良く分かんないんですけど」

ラーが手を挙げながら質問した。

「猫にはない種類の欲望ね。あんたなら、電話してちょうだいこのビデオがあれば、一生楽しめるでしょ。それが本質的な純粹欲望だとすれば、何らかの、例えば無限に消費させるために、本質を差異化しながら更新していく手段ね」

「ナミエちゃんのDVDも好きだけど……」

「だったらそれは、本質的なものと言っしかないわね。猫がスーパーフラットの地平に迷い込むなんて、絶対にないはずなんだから……でもラーの場合はねえ……」

「先生、それは失礼だと思います。ってか、スーパーフラットな欲望について、もう少し話してもらえませんか」

野良猫のパラダイムギャップ

「ラーは、パラダイムシフトって知らないよね」

「ンニヤツ？はい、中学生ですから」

「そんな時だけ中学生を言い訳にするなっちゅうの。20歳にもなつて」

「でもー！人間年齢では、まだ4歳にもなっていないし」

「人間は、自分が生まれ育った時代や、その国の習慣、文化に合わせるのに時間が必要なの。あんた猫だから依るべきパラダイムなんてないでしょ。じゃあ説明するね」

ニュートンパラダイムって言葉、物理学の分野では万能を意味していない。

リンゴが何故落ちるかなんて、それ以前は理論も実証もない形而上学的な問題だった。「物体は地面が好きだから」と答えても、その国の宗教を否定しない限り、誰も反論しなかった。

それをニュートン力学が証明したことによって、物理学には社会を巻き込むほどの著しいパラダイムシフトが訪れる。物理学という狭義でのパラダイムが、社会学としての意味を持たされた。

物理学上のニュートンパラダイムに対応するように、社会は資本主義へとパラダイムシフトした。

日本では1980年頃までにニュートンパラダイムによる資本主義は完成したといえる。

社会的な、特許に類するルールも整備され、工業的な技術さえあれば、イケイケ資本主義の未来は約束されたかのように思われた。

しかし、物理学は第二次世界大戦後、既にアインシュタインパラダイムへとシフトしていた。

その後、相当の期間を経てパソコンの登場以後、社会には急速なパラダイムシフトの波がやって来た。

最早、工業的技術の優位性は、資本主義発展の原動力になり得ない。

国際マーケットの中心は、ニュートンパラダイムにシフトしたばかりの後進国だからだ。

車は、荷物が運べればいいのだ。テレビは情報が得られればいいのだ。

日本車でなければ用を足さない理由が見つからないのである。

30年前の日本車は、当時の日本経済を支えるために、十分機能してきたし、テレビだって20インチのブラウン管仕様で、国民の娯楽の王様であり得たのだから。

現在の日本が売りにしている工業的技術は、必要最低限ではなく、国あるいは企業がメディアにパブリシティーすることで、ターゲットオーディエンスの制限のないスーパーフラットな欲望を掻き立てることによって、付加されるオプシオンに過ぎない。

電化製品や携帯電話の機能のほとんどは、高齢者にとっては邪魔なものといえる。今後、日本の高級車や大型液晶テレビは、アメリカのサブプライム層を除外したプライム層以上の人々に関心を持たれるに留まる。

しかしながら、皮肉にもインシュタインパラダイムによって、複製可能な有利性を確保したことで、スーパーフラットな欲望にまみれた日本が世界を席捲しているものがある。

それがポップカルチャーと呼ばれるアニメやゲームの類だ。

何故ポップカルチャーだけは、世界に受け入れられるか？

お気付きのように、限りなく廉価、場合によっては無料だからと
いうのも理由のひとつではある。

「解りましたか、ラー」

「スーパーフラットな欲望というのは、工業製品やアニメ、ゲーム

などにパラダイムシフトを巻き起こすほどのこともない、単なるデ
ィテイルの変更にも拘らず、意図的なパブリシティーによって扇動
された欲望だということです。日本のポップカルチャーが世界に通
用している理由、他にもあるんですか？」

「なかなかいい質問だね、ラー」

「って、先生の話の流れからいって、そうなるんでしょ？」

「説明します」

マンガを例に採ってみよう。

海外のマンガは、「主義主張」、中でも勧善懲悪ものが多い。理
由としては、宗教からの影響が多いからだ。あとは「ナンセンス」
くらいかな。

海外でも、欲望まみれとまでは行かなくとも、資本主義のシステ
ムは存在する。

そのような状況下、善も悪も関係ない「競争原理」マンガが受け
入れられているのだ。

日本では勧善懲悪ものなんて、昔話の世界でしかない。

「ナンセンス」「主義主張」「競争原理」、以上三つのカテゴリ
ーのうち、「競争原理」マンガが海外の若者、中でもどちらかと
いえば、弱い立場の者に勇気と、現実では味わえない達成感を与え
て来たのだ。

「ナンセンス」マンガは「こちら葛飾区亀有公園前派出所」「ア
ラレちゃん」、「主義主張」マンガは手塚治、松本零士の一連の作
品、「競争原理」マンガに至っては、数限りない。

「競争原理」マンガには座標軸が存在する。

X軸は常に時間であり、Y軸は金、恋愛、優勝、一般的にYの値
はプラスで完結するが、それがマイナスで完結すれば、そのマンガ
は悲劇だということになる。

ところが、海外でバカ受けの「競争原理」マンガが、日本では既
に衰退して来た。

それを説明するには、戦後の日本の経済と教育の相関を示す必要がある。

戦後の日本は、ニュートンパラダイムに基く資本主義経済と、それを支えるための教育を実践してきた。

戦後、日本の子供たちには、極力優しく接して、チョコレートを食べ撒くことと、厳しく命じられたアメリカ兵により、また、戦前まで存在していた神話性を、新憲法と新教育理論で、見事に崩壊させられたことにより、世界中で唯一、民族としてのアイデンティティを喪失した日本人は、同時に世界一扇動されやすい人種と化していた。

そのことは、過去に世界からエコノミックアニマルと称され、畏れられ嘲笑されたことから窺い知ることができる。

現在の日本経済は、既にインシュタインパラダイムに、どつぱりと足を踏み入れている。

にも拘らず、教育はニュートンパラダイムのディテイル修正に留まっている。

何故なのか？今のところ権力者にとっては、不都合がないからである。

物理学におけるインシュタインパラダイムへのシフトは、経済システムに影響は及ぼすが、教育への影響はニュートンパラダイムのように速やかという訳には行かない。

何故なら、イケイケのまま教育をシフトしてもだいじょうぶなニュートンパラダイムと違って、インシュタインパラダイムには制約が必要だからである。

それは、多くの場合経済の停滞、あるいは衰退を意味するので、権力者にとっては不都合といえる。

生体分子工学の範疇では、万能細胞などの利用方法には、海外の宗教的倫理観により、今後、国際的ルールが創設されるかも知れな

い。

しかし、量子論や相対性理論は、経済においても教育においてもイケイケのまま放置される。

原子力発電のパブリシティについては、その動向が注目されるところである。

ところが、日本人が如何にパブリシティに扇動されやすく、欲望まみれといっても、人間であることに変わりはない。

資源の量に劣る経済の閉塞感、デイトイルばかりを取り上げるメディアと教育。

日本のポップカルチャーは、そんな状況下に置かれた若者を、そのまま反映したものに変わりつつある。

ニュートンパラダイムに基づく「競争原理」マンガには、X軸とY軸からなる座標軸が存在した。

しかしながら、世相は明らかにインシュタインパラダイムとの摩擦による、パラダイムギャップにより混乱している。

更に、ランドールパラダイムともなれば、座標軸は放射状に散逸、あるいは存在すらなくなる状況が考えられる。

「競争原理」マンガでは、主人公は座標の中のある点から時間の経過とともに上昇したり下降したりして、物語を形成していく。

ところが、座標軸の存在しない物語の中では、主人公が通過すべき定点も存在しない。

主人公は、目標を持たないただの点として、時空間にふらふらと存在するのみだ。

「パラダイムギャップ」を孕んだポップカルチャーを説明するには、今流行のラヴソングを取り上げる方が、理解しやすいだろう。

今流行っているラヴソングの特筆すべきは、キリスト教的な宗教の教義に近いということだ。

私は善人ですなんてことを、臆面もなく相手に訴えかけて、恋愛関係を構築あるいは守り切ろうとしている。

理由は歴然としている。貧しくて将来の自分に自身さえ持っていないからだ。

今の時代、将来を約束された若者の数は、約束されていない若者に比べ、圧倒的に少ない。

努力が報われる保障を、経済システムや教育は与えてくれない。

「パラダイムギャップ」の字空間をふらふらしている大多数の若者は、現実の社会の中で拠りどころを見付けられない。

宗教が社会と密接に関係していない日本で、若者は恋愛の中に拠りどころを求めているのだ。

殉教者のようにラヴソングを口ずさむ若者の表情は、貧しさに歪んでいる。

「競争原理」のポップカルチャーが世界を席卷しても、「パラダイムギャップ」のポップカルチャーが世界に受け入れられることは、絶対にあり得ない。

幼い頃から「競争原理」のテレビゲームという仮想世界で、夢を見ていた若者が、現実世界で「パラダイムギャップ」に遭遇し、宗教じみた恋愛観に拠りどころを求める。

これが、今の日本の若者文化ってところかな？

野良猫の宇宙

「この国の人間が、パラダイムギャップから抜け出す方法ってあるんですか？」

危惧しているような、いないような微妙な顔で、ラーがアムに問いかけた。

「方法はあるわ。でもプラトンの国家論のようなジレンマが付き纏うからね」

「国家論のようなジレンマって？」

「猫と違って人間は、必ずしも理想を実現させたい訳じゃないということ」

「将来、まだまだ新しいパラダイムが出現するの？」

「形而上学的なものが全て実証されたら終わりよ」

「形而上学的なものって？」

「私にとっての形而上学的なものといえば、最初に生まれたものね」
「わかんない」

「説明します。永遠とは？」

「時間が存在しないこと……ですよね？」

「無限とは？」

「何にも存在しないことです」

「そうね。まあ猫なら誰でも分かることだけど」

「人間は賢いから、みんな分かっているんじゃないんですか？」

「人間は、木を見て森を見ずだから」

「へえっ、そうなんですか」

「百数十億年前に生まれた宇宙は、現在でも無限というよりは寧ろ塵なの。時間のない絶対零度の真空状態が無限だということはわかるよね」

「はい」

「その絶対零度で、エントロピーすら存在しない真空状態の中に、

最初に生まれた質量のない1 Kか0・1 K、あるいはそれ以下の熱は、カオス状態のまま時間のない永遠の中で、積算を重ね無節操に上昇して行った。やがて、絶対高温に達した熱は仕方なく質量へと相転移し、その瞬間からエネルギー保存法則による、量子コンピュータの演算が開始された。最初に生まれた微熱は、私たちが宇宙と呼んでいる塵ではなく、別の塵として固有名詞的な私たちの宇宙の外に存在している。このことは、実証されていないので、最後の形而上学だと言える。こんな話をすると、ヴィトゲンシュタインに文句言われそうだけど」

「でも、話をする自由さはアムの方が多く獲得しているよね」

「当然じゃん。彼には口をつぐまなければならないことが山ほどあったわ。私はこの一点だけ」

「物質が意識を持つことについては、形而上学ではないんですか？」

「量子コンピュータが演算を始めたんだから、エネルギー保存法則が許せば何でも有りよ。たまたまアミノ酸が出来ちゃって、電子伝達が始まって、たまたまシアノバクテリアが出来ちゃって、必然酸素が出来ちゃって、ミトコンドリアが出来ちゃって、多細胞生物ができちゃって、電子伝達を統合するために、固定系細胞の脳が出来ちゃって、リスク回避のために性が分離して、意識の誕生よ」

「脳細胞は固定系なの？」

「欠落部分の補完はあり得るけど、再生はしない。別人格になっちゃうからじゃないかな」

「意識は遺伝するの？」

「種を保存するための意識のようなものは、本能として遺伝して、より環境に適した生命へと淘汰されて行くの。でも、この国の人間はそうではなくって、環境に適さない生命は、淘汰されず社会に隷属させられるの」

「しーん…」

「寝てんじゃないよラー！」

「寝てませんったら」

「目やに付いてるわよ」

「えっ！」

アムに言われたラーは、慌てて両手で目の周りを撫でた。

「パラダイムについてはもういいでしょ。脱線しちゃったけど」

「はあい、じゃあ今日の授業はこれくらいってことで。IT・SHOW TIME！」

ラーはDVDをセットして、モニターの前に鎮座した。

「あんた、さっきまでと目の色が違うんじゃない？」

「そんなことないですよー」

アメリカンショートヘアのナミエちゃんのライブが始まった。

「みなさん、SO EMERGENCY 野良猫LIVE へようこそ」

観客は猫だった。

約二百匹の猫に混じって、アムとラーも「イエーイ！」と叫んでいるはずだ。

「今日は私のライブへようこそ。2猫時間一緒に楽しみませんか？」

「イエーイ！」

何せ猫時間なもので、ダンスナンバーが3曲終わった頃には、ライブは佳境に突入していた。

「ふーっ。ちょっと疲れたかな…みんな楽しんでる？」

「イエーイ！」

次の曲が始まって間もなく、ナミエちゃんが踊るのを止めた。

場内にざわめきが起こった。

ナミエちゃんは、たまに歌詞を飛ばしたりするが、そのライブに限っては歌詞も振り付けも間違っているようには思えなかった。

「ちやうの、ちやうの……私は間違っていないんだけど……今、何かトラブったよね」

ナミエちゃんは、バンドのメンバーの方に振り向いて言った。

「ちょっと待っててね」

場内の照明が消えて、数分経過した。

「ほんとにごめんなさい。今回はビデオ撮影がはいっていたから…」

…」

再びステージに現れたナミエちゃんは、深々と頭を下げた。

「SO E M E R G E N C Y 歌います」

「ふーん、トラブった部分カットしてないんだ」

DVDを観ながら、アムがつぶやいた。

流れ出したイントロはさっきとは全く違っていて、バスドラが激しくビートを刻んでいた。

「じゃあ、次はバラード歌います。C o u l d y o u s m i l e f o r m e ? 聴いてください」

ありふれた一日が 終わりを告げて

着信音を待ち侘び あなたを想う

さよならの後 見ていた夕焼け

何かを言おうと していたはずね

世界中探しても 不可能なこと

優しさだけを抱えて 生きてくなんて

時に争い 時には傷付け

時には誰かに 傷付けられる

ため息の深さに 耐え切れなくても

幸せ見つける 瞳閉じないで

失敗ばかり 数えるよりも

歩こうよ C a n y o u b e l i e v e m e ?

S m i l e f o r m e ついて行くから

険しい道でも くじけたりしない

迷つてみるのも たまにはいいけど
C o u l d y o u s m i l e f o r m e ?

友達に囲まれた 小さな世界
旅立つ時もみんなで 笑えるのかな
離れていても 絆を信じる
心は弱さを 隠しているね

どんなこと諦めて 大人になった
人は孤独を抱えて 生きてくなんて
時に悩んで 時には不安で
時には自分を 傷付けている

躓いて転んで 泥にまみれても
あなたの隣に 私がいるから
悔しい気持ち 誤魔化さないで
叫ぼうよ C a n y o u b e l i e v e m e ?

S m i l e f o r m e ついて行くから
険しい道でも くじけたりしない
止まってみるのも たまにはいいけど
C o u l d y o u s m i l e f o r m e ?

「ニャオーン!」
一階から猫の声がした。
「あつ、我輩さんだニャオー!」

野良猫の小説

ラーとアムが部屋から出て階段を下りてみると、我輩先生は猫用入り口から入ったところで、この家の奥さんが用意してくれた餌を、美味しそうに食べていた。

「こんにちは」

「ご無沙汰しています」

ラーとアムは、頭を下げて挨拶した。

「やあこんにちは。アムが二階に上がっているなんて、珍しいねえ」
「はい、野良猫の品格とかいう本にかぶれたラーに付き合ったら、成り行きで……」

「ほおつ、面白そうじゃのお。わしも仲間に入れてもらおうとするか」
「一段落してナミエちゃんのDVD観てますけど」

ラーが少し困ったような顔をして言った。

「心配するな。今日は二匹だからだいじょうぶじゃ」

「はい」

ラーはしぶしぶ返事をした。

「うんしょ、うんしょ」

ラーがホールへ上がるうともかく我輩先生のお尻を頭で押した。

「ごくろつ、世話を掛けるのお。もう一息じゃ」

「ふうつ。ここからはアムも手伝ってね」

「……はい」

我輩先生は猫年齢80歳のトラ猫で、体重は14kgと少し重めだった。

先生という敬称は、彼が自称小説家であるからだ。

アムとラーが代わる代わる我輩先生のお尻を頭で押して、三匹はやつのことでラーの部屋へたどり着いた。

「ところで、わしに何か用かの？」

息を切らせているアムとラーに比べ、我輩先生は涼しい顔をしていた。

「だから、ナミエちゃんのDVDを観てたんですって」

猫時間二時間のライヴは既に終了していた。

「そうか、わしの話を聞きたいってか」

「別にー」

アムとラーは何ら興味を示さなかった。

「昨日いつものように本屋の店内を徘徊しているときに、芥川賞作家の以前の作品が目に入ったんだな。失礼してちよつと目を通させてもらって、んっ？と思った訳だ」

「しーん……」

「おい、折角話してやってるのに、もう少し身を入れて聞きなさい」「んっ？と思ったんでしょ。それから？」

仕方なくアムが相槌を打った。

その間にラーは土鍋を引き摺って来て、中に納まり丸まっていた。「それからどうした？」

土鍋の縁に頭を乗せた姿勢で、ラーも相槌を打った。

「おっほん、確かに文体はセンチヴであり、雨矢ふみえの『われら少女漂流民』を彷彿とさせるし、思い込みで暴走するくだりの疾走感の特筆すべきものがあつた」

「時代におもねた作品じゃないのね。だったら、それはそれでいいんじゃないの？」

アムはそう言うってから、ラーの様子を伺った。

「ムニヤムニヤ……」

ラーは土鍋の中にすっかり埋没して、寝言を言っていた。

「そこじゃ、『限りなく透明に近いブルー』などはポップキツチュとして受容されたが、本作品はマイナー指向であるからして、あまりに内省的であるが故に、受容されればされるほど、本来であれば

作者は疑心暗鬼になつてしまふはずなのじゃ」

「だからどうだと？」

「だからじゃ、キツチュであろうと、スーパーフラットであろうと、ポップであればそれもありだろう。また、頭の固い権威が横槍を入れるのも当然ありだろう」

「選考基準が曖昧だと？この多様化の時代、別にいいんじゃないですか？」

「多様化の時代だから、日陰に咲く華を表舞台に引き摺り出すような偶然の一致に興味津津なんじゃ」

「我輩先生、古いよ」

「何じゃラー、起きておつたのか」

我輩先生は少しムツとした顔をした。

「そんな時のために、別にー…があるんですよ」

「何じゃそれは？」

「今時の人間つて生き物は、枝葉の部分が複雑で、何でもありなの。納得の行かないことに反論してもきりが無いから、別にー…の一言であえて自分を蚊帳の外に置くの。それでさえ軋轢が生じるんだから…あー怖い怖い。ねえアム」

「まあね。好きにしてくださつて結構ですから、せめてそつとしておいてよと言いたくなるわ」

「そんなものかのー」

「そんなものですよ先生」

ラーが我輩先生をなだめるように言った。

「じゃあ、この件については終了っ！」

アムの終了宣言の後、我輩先生は何かを思い出したようだった。

「野良猫の品格がどうのこうのと言つてなかったかな？」

「はい、それはきつかけに過ぎなくて、経済のことなんかを少し話してました」

「おつ、それならちょうど猫に小判という小説を作ったところだぞ」

我輩先生は、周囲の困惑をよそにストーリーテラーに変身していた。

黄昏始めた公園、遊歩道の両脇に整然と並んでいる榆の黄葉が金色に揺れている。

野良猫が十匹それぞれのペースで、食後の散歩を楽しんでいた。

野良猫たちは色んな餌場を知っているので、明日の食事を心配する必要はなかった。

「今日の夕食どうだった？」

「鰯の干物だよ」

「御馳走じゃん。僕なんか今日もキャットフードさ」

「あんた、またラーンとこ行ったんでしょ。最高級って言ってもキャットフードばかりじゃ飽きちゃうよねえ」

「ラーは飽きないみたいだよ。それにラーは飼い主とお話出来るみたいだし。食べたい物があれば、いつだって用意してくれるんだって」

二匹がそんな話をしているうちに、他の猫たちが騒がしくなった。「どうかしたの？」

二匹は猫たちが集まっているところへ近付いて尋ねた。

「こいつがなんか拾って来たんだ」

見ると一匹の猫が、何か光るものをくわえている。

「ふむふむ。これは小判というものじゃ。まさか本物が落ちているとはのお。しかも相当金の純度が高いことからして、徳川吉宗の時代のものじゃろうて」

遅れてやって来た最長老の猫が、カチカチと小判を噛んだ後で言った。

「ふうつ、顎が痛いや……一体何なんですか、小判って？」

草の上へ小判を落とした猫が尋ねた。

「昔のお金じゃよ。しかも一万円札10枚分くらいの値打ちがあるんじゃないよ」

「へーっ、それじゃ食べる物たくさん買えますね」

「まあ10猫年分は買えるじやろって」

「ひゃーっ！じゃあ餌場のない猫にあげたらきつと喜ぶのになあ」

「そうだにゃあ」

みんな頷いて、小判を残したまま、その場を立ち去った。

小判は最後の木漏れ日に、一瞬山吹色の光を放ったが、やがて押し寄せた闇に沈黙した。

「終わり」

ピトピトピト。

アムとラーはまばらな拍手を送った。

「我輩先生の小説にしちゃ、にやかにやかのもんでしたよ。ねえ、アム」

齒に絹を着せぬラーにしては珍しく、高い評価だった。

「そうね。経済原理小説として完結しているわ。食べる物さえあれば、猫に小判は必要ないものね。これが人に小判だと、この小説の何百倍の言葉を費やしても足りないんだろうけど…」

「そのとおりじゃ。全く人間という生き物は、何を考えておるのかさっぱり分かん。食べる物の心配がないのなら、のんびりと宇宙や自然の神秘にでも浸っておれば幸せなものを…」

「我輩先生、やっぱり古い、いくら人間でもそれじゃまるで大昔の哲学者ですよ。人間だって近頃は猫並みになってるんですから。それを言うなら、宇宙や自然に触れていれば幸せなものを…ですー」

我輩先生は、ラーの意見に少々面食らったようだった。

「そうなのか？アム」

「確かに、ただ一つの形而上学を残すのみとなっています。ですが、猫のように誰もが微積分の概念を持っている訳ではありませんから、未だに大時代的な哲学がまかり通っているのも確かです」

「なぜじゃ？学校で教えているのではないか？」

「学校では解を求める方法としてしか教えませんから、試験で正解

したからといって、殆どは概念の持ち合わせなんてないんです」

「そうか…我輩など、因数分解が苦手な解は求められないが、概念はしっかりと持っておるぞ」

「我輩先生…当たり前です。猫なんですから」

ラーが、やれやれという風に言っただけで笑った。

「それもそうじゃの、つい猫だということを忘れておった。我輩も年じゃのお」

野良猫の政治

「ニャー！」

再び階下で猫の呼び声がした。

「ボランティアさんだ！ちよつと失礼します」

ラーはトントントンと階段を駆け下りた。

「お疲れ様です。じゃあこれ、お願いしますね」

「はい、いつもありがとうございます」

ボランティア猫はお礼を言うと、缶詰から小さなポリ袋二つに分けられた高齢猫向けの餌を、首から提げて猫用入り口から消えた。

「どうも失礼しました」

「何言つてんのよ、毎日偉いわねえ。それにしてもラーの飼い主も大変よね」

「お陰でミケ婆さんもタマ爺さんも、ゆとりの老後を満喫しておるよ。結構なことじゃ」

「我輩先生は、もつと足腰を鍛えておいてくださいね。三匹分じゃボランティアさんも大変だから」

「おつ、おー」

ラーに釘を刺された我輩先生は、仕方なく虚勢を張ってみせた。

「人間つて、みんなそういうものなんですか？」

ラーにとつて、人間に小判という諺の意味するところのものは、なんとも複雑怪奇な、およそ猫の思考回路では全くもって想像も及ばない、不思議現象であつた。

「人間はメディアに支配されておるからのお。昨今、直接洗脳はさすがに無理があるが、混乱 誘導ディベイト 浅薄リテラシー 間接洗脳という方程式が未だに通用しているところが、この国の凄いところじゃ」

「いつからそんなことになっちゃったんですか？」

ラーは好奇心を掻き立てられたように、招き猫の姿勢を保ったまま質問していた。

「枝葉に目を奪われなければ、種明かしは案外簡単なことなのじゃのおアム」

「まあ猫にしてみれば、小判に目を奪われること自体あり得ませんからね」

「引き金は、ギヴミー・チョコレートかのお？」

「占領下に置かれた日本の少年少女には、寛大であれ、優しくあれ、お菓子をばら撒けと徹底した指導を受け、まるで正義の味方であるかのように振舞うアメリカ人兵士による洗脳。当時洗脳されたのが、それまで鬼畜米英などという軍国主義教育を受けていた世代ってことですな」

「自分たちが教え込まれたこととは全く正反对で、アメリカとはなんと平等で豊かな国なんだろうと、誰しもが考えた訳じゃ。それに比べて戦前の親や先生、政治家なんて…民主主義万歳！資本主義万歳！」

「一方で当時の大人たちはというと、形骸的な東京裁判によって、意味を問うこともないままに、国民の戦争責任をアメリカが呼ぶところの戦犯に押し付けてしまった。言い換えれば、非は日本にのみあったと認めてしまった訳ですよ。それによって、戦後に生まれた子供たちに対する権威のようなものが、完全に失墜してしまった」

「そうじゃな、小判の効用を信じる限りにおいて、覇権争いにどちらが正義などということはあり得ない。それは個人レベルの争いにして同じことじゃ。正義が問われるとすれば、戦争における方法論そのものについてじゃろう」

「原爆投下や、イラクへの派兵のように、国家間の利害の問題に正義を振り翳して世界を巻き込むことですか？」

招き猫ポーズのまま、ラーが口を開いた。

「正義などない戦争にもルールがなければならん。小判を奪い合う者たちの間で、ルールの確立されているのはスポーツくらいのもの

で、スポーツマンシップとは良く言ったものじゃ」

「プロスポーツと戦争を並べて語ることは、問題があるんじゃないですか？」

「格闘技にしてみても、ルールがなければ、小判を奪い合うただの殺戮ゲームになってしまっじやろ」

「ルールって、猫には馴染みのない言葉ですね。形而上学のような……」

ラーの目は右脳を覗き込んでいた。

「猫には小判の効用が及ばないものね。食べ物の争奪にしても、生命を維持する限りにおいて、個々のレベルでは命を懸けるけど」

「戦前に存在した権威の失墜、アメリカ至上主義の展開、アメリカに牙を剥くことのない、アジアの弱小資本主義国家日本の誕生じゃ。しかし1950年に朝鮮戦争が勃発し、アメリカは日本の位置付けを転換せざるを得なくなった。ソビエト連邦などの社会主義国家との対立が、イデオロギーの枠組みを越えて、軍事的脅威にまで進展したからじゃ。日米安全保障条約の締結以降、戦後の経済成長などおぼつかないはずの日本が、軍需産業の再編により、新たな復興への道を歩み始めたのじゃ」

「当時のアメリカは、資本主義至上主義とはいえ、かろうじて宗教的な基盤の上に立つ倫理観は存在した訳だけれど、戦前を全否定した日本が資本主義の権化となるのに何等障壁は存在しなかったのね。ここまでの経緯は理解出来た？」

「はい」

「次に、世界一小判に目のない日本人が、どのようにルール無き資本主義に取り込まれていったのか」

「ルールを敷設したのは田中角栄じゃ。1950年代から日本道路公団等幾つもの特殊法人を設立し、ガソリン税、重量税を道路建設のために特別会計とし、官僚に金をばら撒き、天下り先を用意し、

拒否する者を冷遇した。政官の癒着の恒常化の出发点じゃ。田中角栄は1972年に日本列島改造論を執筆し、その中にはグリーンピア構想の記述もあったそうじゃ。そして莫大な資金力もあって、その年に内閣総理大臣となった」

「政・官・財の癒着により、道路など、新しくインフラを整備するたびに、莫大な利権が発生するシステムが確立された時代ね。本州四国連絡橋なんかは、政治的配慮の色合いが濃いようだけど、いずれにしても現在の途方もない財政赤字を導いた要因の一つに間違いないわ」

「でもインフラ整備って、それ自体は赤字を出しても、経済成長に寄与することはあり得るよね？」

「赤字を出すインフラ整備が問題ではない。経済成長に寄与せずとも、公共の福祉の向上という視点に立ったインフラ整備は必要と言える。ただ、新しい道路が整備され、そのために旧道沿線のレストランなどが閉店の憂き目を見るなどということがあれば、公共事業の平等性が疑われることだろう。」

民間事業ならいざ知らず、およそ公共事業であるなら、影響範囲におけるプラスの側面とマイナスの側面を検証し、将来にわたって保障することを確約するべきなのじゃ。そのことがなおざりになったまま、インフラ整備が継続されたことが、政・官・財の癒着が存在する一つの明確な証拠と言える」

「現在のインフラ整備では、メリットとデメリットの比較において、デメリットの比率が急激に高まっているから、国民の目にも不自然に映るのは否めない。政・官・財が癒着して建設事業費の中から利益を得るシステムは時代遅れよね」

「ようやく癒着がなくなったということですか？」

「ラーには現状が良い方向に進んでいるとは到底思えなかった。」

「残念でした。小判を求める予先が変化しただけのことよ」

「田中角栄が確立したシステムは、コストの中身を掠め取って利益を得ようというものだった。資本主義がピークを迎えるまでは、こ

のシステムは有効だったといえる。だが、バブル崩壊後の日本では最早通用しなくなっており。古いシステムは、小判の流れを追って行けば何らかの不正にたどり着く。昨今はメディアの追及も厳しいからのお。しかし！しかしじゃ！今更、機能しなくなったシステムを執拗に追求したところでどうだというのじゃ。政・官はすでに新しい利権システムを構築しているというのにじゃ。これも田中角栄のメディアの統合による弊害なののお」

「じゃあ、新しい利権システムってどんなものなの？」

野良猫の租税条約

「我輩先生が、バブル崩壊後には田中角栄の確立したシステムが通用しなくなったと言ったでしょ」

「はい、資本主義経済がピークを迎えた後では、インフラ整備の経済効果が期待できずに、平等性とかに摩り替えられ、国民のコンセンサスが得にくい状況になったんですね」

ラーは頭の中を整理しながら答えた。

「ところが、大義名分を失くした後も、旧利権システムに固執する政・官・財により、インフラ整備は継続されたのじゃ」

「民主主義を標榜している国で、そんな露骨な方法がまかり通ったなんて、お笑いですね」

「それを説明するには、まずバブル経済から日米構造協議までの経緯を分析する必要があるわね」

「なんですか、その協議って？」

1990年6月28日にアメリカ大統領（共和党ブッシュ父）と内閣総理大臣（自由民主党海部俊樹）に提出された構造問題協議共同報告書のことなど、ラーが知る由もなかった。

「1985年、アメリカの貿易収支の莫大な赤字を解消するため、日・米・英・独・仏の間でドルを切り下げるための協調介入であるブラザ合意がなされた。その結果、当初の予想を遥かに上回る円高が進行し、日本では円高不況を警戒して低金利政策が採られた。それが土地や株式への投資を煽ることになり、歴史に残るバブル経済が発生した。急激な円高の影響は、思い掛けない事態も巻き起こした。アメリカの資産が日本企業に大量に買収されることになった。そこでアメリカは構造問題協議共同報告書の中で、アメリカへの投資の資金を、日本国内での内需に摩り替える作戦に出たのじゃ。中でも一番の切り札は、10年間で400兆円以上の公共投資であっ

た。その翌年には、日本の金融機関の健全性や安全性を担保する政策の不備で、バブルが崩壊したにも拘らず、しかも田中角栄の時代のようにには経済効果が見込めないにも拘らず、公共投資は実行に移された。その財源となった国債や地方債はもちろん有利子であり、今や国、地方の財政を破綻に向かわせている」

「それでアメリカは日本資本の脅威を払拭することに成功を収めたんですね。でも、現在の日本は、規制緩和を実行して、グローバル経済に乗り遅れないように頑張ってるんじゃないですか？」

「年次改革要望書について、私が説明するわ」
ラーの発言を受けてアムが説明を始めた。

「1994年頃から毎年のように、アメリカから年次改革要望書なるものが提出されているの。内政干渉とも見えるし、期限も切られたりして高圧的なのに、日本は構造改革や規制緩和の名の下に、粛々と実行しているの。大規模小売店法の廃止、株式会社による農地保有、郵政事業の民営化、日本道路公団解散、三角合併制度の施行、建築基準法改正、労働者派遣法改正、法科大学院設置と司法試験制度変更等々、年次改革要望書の内容は、全産業における株式会社化、外資の参入障壁撤廃、実質GDPの見せ掛けの上昇と国内資本の消耗、労働者のグローバル化、資産家による三権支配などがターゲットとされているの」

「全産業が株式会社になったり、労働者のグローバル化が進むとどうなっちゃうの？」

「グローバル経済とは、言い換えれば物質経済に対する金融経済の絶対優位性の確立だから、資産家に利益が集中するのは否めない。先進国にとって労働者の賃金の低廉化を招くのは必然ね」

「だからみんな株式会社にしちゃって、資産をたくさん持った投資家に稼いでもらって、その利益を再分配してもらっ訳ですね」

「利益の再分配って、ラーはどうすればいいと思う？」

「まず、最低賃金をうんと引き下げて、企業に国際競争力を与える。次にその分儲かった投資家の配当や株式売買の税金を社会保障のために使えばいいんじゃないんですか」

それは、ラーにとつては名案に思えた。

「でも、投資の利益に掛けられる税金は安く抑えられているし、時限立法といつても資産家のための優遇措置だから……」

「力のある者に引ッ張ってもらうという政治かもいることだし……」

「詭弁じゃよ」

我輩先生がラーの意見を一蹴した。

「政治家が投資での利益に掛かる税金を高くするには、抵抗勢力は自分自身も含まれているもの。それに、税金を高くしても投資家の中には外国人も多いしね」

「どういうこと？」

「例えば、日本とアメリカの間には日米租税条約というのが締結されていて、それまでは源泉地国課税（所得の発生した国で課税する）が主だったのが、2004年には多くの部分が居住国課税（住所のある国で課税する）に改正されちゃったし」

「せめて日本の投資家の分だけでも増税しなきゃ」

「でも、ささやかな恩恵を受けているミニ投資家もいることだし、それに……ラーもファンドって知ってるよね」

「村上ファンド？」

「投資信託などの金融商品を指すんだけど、投資家から集めた資金を株式や不動産などに投資して、運用による利益を出資に応じて分配するの」

「別に、直接株式に投資すればいいじゃん」

「個人レベルじゃ、投資先の企業にプレッシャー与えられないですよ」

「配当増やせとか言えないもんね」

「それと、さつき租税条約について話したでしょ」

「はい」

「仮に日本の投資家がアメリカのファンドに投資して、そこが税金の掛からない国のファンドを経由して日本の株式を取得すれば、税金が免除されちゃうの」

「どうして？」

「租税条約では相手国の法律を超えて課税出来ないことになってるからよ。もちろん脱税なんだけど、いろんな国を経由されると、国税庁でも把握が困難になってしまうの」

「じゃあ、日本の労働者も後進国並みの賃金に甘んじることなく、相乗りと行きましょう！」

「ブーッ！」

ラーの提案にアムは両前足をクロスさせながら駄目だしした。

「グローバルゼーションは国家を弱体化させるとはいえ、そんなことが可能なのはヘッジファンドくらいのものね」

「ヘッジファンドって？」

「出資者になるには、投資家の目指す利益が一致していること、信頼関係が築けること、相当の資産があることなど、厳しい条件があるの。一般の労働者なんかお呼びじゃないってことね」

「資産をたくさんもってる政治家には、道路なんてどうでもいいってこと？」

「日本のファンドもね。ちょっとした不祥事でもリストアップされやすいから、外国のファンドに出仕する方が安全でしょ。そうすると競合する日本のファンドは、目の上のたんこぶみたいなものかな」

「日本の労働者の未来は？」

「ある訳ないじゃろうて」

我輩先生が止めを刺すように切り捨てた。

「だけど、日本人は資産家も無資産家も世界一小判に目がないんだから、同じ穴のむじなと言えるんじゃないの？」

「そうでない人だつて資産家の中にも、無資産家の中にもきつとい
るはずよ」

ラーは猫のくせに、何故かむきになっていた。

「だったら、子供に対する教育の力を信じるしかないのー」

我輩先生は半ば投げやりな言い方をした。

「教育の機会均等といえば、アメリカでもフリードマンなんかが詭
弁を弄してたけど、義務教育にしてみても資産家が牛耳ってるんだ
から、無資産家に都合の良い教育なんてあり得ないわ」

「その通りじゃ」

「そうですね…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4037d/>

野良猫の言い分

2010年10月10日03時43分発行